自立活動研究会研究報告

テーマ「一人一人の障害特性・ニーズを踏まえた自立活動の充実」

サブテーマ：～指導すべき課題の明確化・可視化に向けて～

１．はじめに

今年度の研究テーマは、昨年度の研究を継続し、「一人一人の障害特性・ニーズを踏まえた自立活動の充実」と設定した。一方、サブテーマについては、「指導すべき課題の明確化・可視化に向けて」と変更し、研究部会を実施した。サブテーマを上記のように設定した意図は、昨年度の研究部会にて挙げられた自立活動の課題（例えば、各教科等との関連が不十分、指導内容に偏りがある等）を改善するためには、流れ図や教育支援プランのような書面を作成する必要性を感じたためである。子どもの取り組むべき課題を書面で整理していく過程（可視化）で、課題をより「明確化」にすることができる。このような取り組みを行うことで、子どもの実態を理解した適切な支援・指導が可能となり、自立活動の専門性を向上させることができると考える。また、教員同士が意見を交換しながら流れ図等を作成していくことは、有意義な学びの場になりうる。

以上のように、書面を作成することで、様々な場面において好影響がもたらされるが予想されたため、上記のようなサブテーマを設定し、研究部会を開催した。研究部会は、コロナ禍の影響を考慮し、会場校での集会型の実施を行わず、第１回は書面開催、第２回の事例発表、および第３回の講師による講演は、リモート形式で開催した。

２．研究報告

（１）第２回　研究会　令和４年１０月２８日（金）リモート開催：深谷はばたき特別支援学校

ア．事例提供

越谷特別支援学校　：海老沢ひとみ教諭

「流れ図（自立活動の指導目標・内容設定の手続き）作成研修」の取り組み

・令和４年度の越谷特別支援学校における『流れ図』作成の研修の様子が紹介された。作成の手順、メリット、特徴、今後の課題などが報告された。

イ．研究会終了後のアンケートより（一部抜粋）

・本校でも「流れ図」作成における研修を昨年度、今年度と夏季休業中に行っているが、１回の研修時間は１時間半から２時間ほどであり、時間のかけ方に違いがあった。本校ではZoom機能を活用して全体で同時進行とし、自立活動部員が巡回をして質問等を受けるというやり方をとっている。越谷では「話し合いのリード役」を立てて打ち合わせの時間を設けているようだったので、その辺のポイントを聞いてみたいと思った。

・研修のゴールを単に流れ図を作成するということではなく「プランＢの見直し」とした点も参考になった。なぜ流れ図があり、なぜ作成していかなければならないのか、改めて考える必要があると感じた。

・越谷特別支援学校の事例報告から、大きく２つのことを学びました。１つ目は、研修方法です。自立活動の理解を深めるために、夏季休業中に２日間を利用して、教職員同士で協議していく方法は、本校ではやっていないことでした。本校の研修方法を検討してい

く際に、学んだことを取り入れられるところは取り入れていきたいと感じました。
２つ目は、流れ図の作成です。流れ図の作成の仕方は今回初めて知ったので、取り入れて計画的に生徒のことを考えていけるようにしていきたいです。本校では、流れ図を作成していないので、今回の事例報告を受けて、本校でも実施できる機会があれば、ぜひ取り組んでみたいと感じました。

・流れ図の作成手順において、将来の姿をポジティブな視点で考えることについては、本校の自立活動担当教員の中でも見落とされがちでした。

（３）第３回　研究会　令和５年１月２７日（金）リモート開催：深谷はばたき特別支援学校
講演「自立活動の指導における指導目標・内容の設定と評価」
講師　独立行政法人国立特別支援教育総合研究所　　吉川知夫先生
内容　※資料より抜粋
・自立活動に関する学習指導要領改訂のポイント
・自立活動の概要
・自立活動の個別の指導計画の作成
・自立活動の評価

３．おわりに

今年度も書面とリモート形式で計３回、研究部会を開催することができた。第２回研究部会では、流れ図の作成に関する実践報告があり、これから取り組もうとしている学校にとって大変参考になる内容の発表であった。第３回の研究部会では、講師の吉川先生より、自立活動の学習指導要領における位置づけや、自立活動の現状、自立活動の評価等、様々な視点からご講演をいただいた。質疑応答の時間には、「自立活動の実施方針について、学校内で共通意識をもつことが難しい。どのように進めていったらよいか。」という発問があった。講師の吉川先生より、「他の学校でうまくいっている取り組みを参考にしたらどうか」という提案を発端に、各学校での取り組みについて情報共有する機会が設けられた。複数の学校から、どのように取り組んでいるかについて（例えば、自立活動の研修の実施時期や回数、担外としての自立活動専任教諭の活用など)、話を聞くことができた。他校の自立活動の実施についてなかなか知る機会が少ない中、活発な意見交換が行われ、貴重な時間となった。

自立活動は、「特別支援教育の専門性である」と言われている。私たちの多くは、修学期間のうちに自立活動の授業を受けてきていない。そのため、自分が修学してきた経験を生かすことができず、指導法について新しく学ばなければならない。加えて、自立活動には教科書がなく、教員が対象生徒の困っていることを適切に判断し、それに応じた指導方法を考えなければならない。このような指導の複雑さと難しさが、教員の困りや、悩みにつながっていると考える。今年度の研究のサブテーマである「課題の明確化」や「可視化」を行うことができれば、教員の困りや悩みを解決する一助になるであろう。今年度の研究部会では、流れ図の作成や実践例についても紹介された。流れ図のようなものを利用することで、システマティックに自立活動が実施され、子どもたち一人一人のニーズに応じた教育が可能となるであろう。

来年度も引き続き、特別支援教育の専門性である自立活動の充実を目指し、研究会を開催していく。